

魔術

芥川
竜之介



魔術

芥川龍之介

ある時雨しぐれの降る晩のことです。私わたしを乗せた人力車じんりきしゃは、何度も大森界隈おおもりかいの険しい坂けわを上ったり下りたりして、やっと竹藪たけやぶに囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒かじぼうを下しました。もう鼠色のペンキの剥はげかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯ちようちんの明りで見ると、印度人インドマティラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標ひょう札さつがかかっています。

マティラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計っている

カルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門ばらもんの秘法を学んだ、年の若い魔術まじゅつの大家なのです。私はちょうど一月ばかり以前から、ある友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあっても、肝腎かんじんの魔術を使う時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前以て、魔術を使つて見せてくれるように、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たのです。

私は雨に濡れながら、覚束おぼつかない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下にある呼鈴よびりんの釦ボタンを押しました。すると間もなく戸が開あいて、玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御

婆さんです。

「ミスラ君は御出ですか。」

「いらつしやいます。先ほどからあなた様を御待ち兼ねでございました。」

御婆さんは愛想よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨の降るのによく御出でした。」

色のまつ黒な、眼の大きい、柔な口髭やわらかくちひげのあるミスラ君は、テエブルの上にある石油ランプの心をしん燃ねりながら、元気よく私にあいさつ挨拶しました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見出来れば、雨くらいは何ともありません

ん。」

私は椅子いすに腰かけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋の中を見廻しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテエブルが一つ、壁側かべぎわに手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——ほかにはただ我々の腰をかける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁ふちへ赤く花模様を織り出した、派手はでなテエブル掛でさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目いとめが露あらわになっていました。

私たちは挨拶をすませてから、しばらくは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いていましたが、やがてまたあの召使いの御婆さん

が、紅茶の道具を持ってはいつて来ると、ミスラ君は葉巻はまきの箱の蓋ふたを開けて、

「どうです。一本。」と勧めすすてくれました。

「難有ありがとう。」

私は遠慮えんりょなく葉巻を一本取って、燐寸マッチの火をうつしながら、

「確かあなたの御使いになる精霊せいれいは、ジンとかいう名前でしたね。するとこれから私が拝見する魔術と言うのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉巻へ火をつけると、にやにや笑いながら、匀にらいの好い煙を吐いて、

「ジンなどという精霊があると思ったのは、もう何百年も昔のことで

す。アラビヤ夜話^{やわ}の時代のことでも言いましょうか。私がハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思えば使えますよ。高が進歩した催眠術^{さいみんじゅつ}に過ぎないのでから。——御覧なさい。この手をただ、こうしさえすれば好いのです。」

ミスラ君は手を挙げて、二三度私の眼の前へ三角形のようなものを描きましたが、やがてその手をテーブルの上へやると、縁へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。私はびっくりして、思わず椅子^{いす}をずりよせながら、よくよくその花を眺めました。確かにそれは今の今まで、テーブル掛の中にあつた花模様の一つに違いありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持って来ると、ちょうど麝香^{じゃこう}か何かのように重苦しい匂さえるのです。私はあまりの不思議さに、

何度も感嘆かんたんの声を洩もらしますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、また無造作むぞうさにその花をテーブル掛の上へ落しました。勿論落すともとの通り花は織り出した模様になつて、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かせなくなつてしまふのです。「どうです。訳はないでしょう。今度は、このランプを御覧なさい。」

ミスラ君はこう言いながら、ちよいとテーブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子ひょうしにどういふ訳か、ランプはまるで独楽こまのように、ぐるぐる廻り始めました。それもちゃんと一所ひとところに止つたまま、ホヤを心棒しんぼうのようにして、勢いよく廻り始めたのです。初はじめの内は私も胆きもをつぶして、万一火事にでもなつては大変だと、何度もひやひやしましたが、ミスラ君は静に紅茶を飲みながら、一向騒ぐ容子ようすもありませ

ん。そこで私もしまいには、すっかり度胸が据^{すわ}ってしまつて、だんだん早くなるランプの運動を、眼も離さず眺めていました。

また實際ランプの蓋^{かさ}が風を起して廻る中に、黄いろい焰^{ほのお}がたつた一つ、瞬^{またた}きもせずにともっているのは、何とも言えず美しい、不思議な見物^{みもの}だったのです。が、その内にランプの廻るのが、いよいよ速^{すみやか}になつて行つて、とうとう廻っているとは見えないほど、澄み渡つたと思いますと、いつの間^まにか、前のようにホヤ一つ歪^{ゆが}んだ気色^{けしき}もなく、テエブルの上に据^{すわ}っていました。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供^{こども}瞞^{だま}しですよ。それともあなたが御望みなら、もう一つ何か御覧に入れましょう。」

ミスラ君は後^{うしろ}を振返つて、壁側^{かべぎわ}の書棚を眺めました、やがてその

方へ手をさし伸ばして、招くように指を動かすと、今度は書棚に並んでいた書物が一冊ずつ動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで来ました。そのまた飛び方が両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交う蝙蝠こうもりのように、ひらひらと宙へ舞上るのです。私は葉巻を口へ唧くわえたまま、呆氣あつけにとられて見ていましたが、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も自由に飛び廻って、一々行儀よくテエブルの上へピラミツド形に積み上がりました。しかも残らずこちらへ移ってしまったと思うと、すぐに最初来たのから動き出して、もとの書棚へ順々に飛び還かえって行くじゃありませんか。

が、中でも一番面白かったのは、うすい仮綴かりとじの書物が一冊、やはり翼のように表紙を開いて、ふわりと空へ上りましたが、しばらくテ

エブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落しに私の膝へさつと下りて来たことです。どうしたのかと思つて手にとつて見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ君へ貸した覚えがある、フランス
仏蘭西の新しい小説でした。

「永々御本を難有う。^{ながなが}」

ミスラ君はまだ微笑を含んだ声で、こう私に礼を言いました。勿論^{もちろん}その時はもう多くの書物が、みんなテエブルの上から書棚の中へ舞い戻つてしまつていたのです。私は夢からさめたような心もちで、暫時^{ざんじ}は挨拶さえ出来ませんでした。その内にさつきミスラ君の言つた、「私の魔術などというものは、あなたでも使おうと思えば使えるのです。」という言葉を思い出しましたから、

「いや、兼ね兼ね評判ひょうばんはうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほど不思議なものだろうとは、実際、思いもよりませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えないことのないと言うのは、御冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作ぞうさなく使えます。ただ——」と言いかけてミスラ君はじつと私の顔を眺めながら、いつになく真面目まじめな口調になつて、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず欲を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」

私はこう答えましたが、何となく不安な気もしたので、すぐにまた後^{あと}から言葉を添えました。

「魔術さえ教えて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは無^{ぶしつけ}駄だとも思つたのでしよう。やがて大^{おお}様に^{うなず}頷きながら、

「では教えて上げましょう。が、いくら造作なく使えろと言っても、習うのには暇もかかりますから、今夜は私の所へ御^{おとま}泊りなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えて貰う嬉しさに、何度もミスラ君へ御礼を言いました。が、ミスラ君はそんなことに頓^{とんちやく}着する気色^{けしき}もなく、静に椅子から

立上ると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじっと見上げました。

×

×

×

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかりたった後の^{のち}ことで
す。これもやはりざあざあ雨の降る晩でしたが、私は銀座のある倶^く楽^ら

部の一室で、五六人の友人と、暖炉だんろの前へ陣取りながら、気軽な雑談に耽たっていました。

何しろここは東京の中心ですから、窓の外に降る雨脚あまあしも、しつかりなく往来する自動車や馬車の屋根を濡らすせいか、あの、大森おおもりの竹藪にしぶくような、ものさびしい音は聞えません。

勿論窓の内の陽気なことも、明い電燈の光と言い、大きなモロツコ皮の椅子いすと言い、あるいはまた滑かに光っている寄木細工よせぎざいくの床ゆかと言い、見るから精霊せいれいでも出て来そうな、ミスラ君の部屋などとは、まるで比べものにはならないのです。

私たちは葉巻の煙の中に、しばらくは獺りようの話だの競馬の話だのをしていましただんろが、その内に一人の友人が、吸いさしの葉巻を暖炉だんろの中に

抛りこんで、私の方へ振り向きながら、

「君は近頃魔術を使うという評判だが、ひょうばんどうだい。今夜は一つ僕たちの前で使って見せてくれないか。」

「好いとも。」

私は椅子の背に頭をもた寄せたまま、さも魔術の名人らしく、おうへい横柄にこう答えました。

「じゃ、何でも君に一任するから、世間の手品師などには出来そうもない、不思議な術を使ってみせてくれ給え。」

友人たちは皆賛成だと見えて、てんでに椅子をすり寄せながら、促すように私の方を眺めました。そこで私は徐におもむろ立ち上って、

「よく見ていてくれ給えよ。僕の使う魔術には、種も仕掛しかけもないのだ

から。」

私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃え盛^{さか}っている石炭を、無造作^{むぞうさ}に掌の上へすくい上げました。私を囲んでいた友人たちは、これだけでも、もう荒胆^{あらぎも}を挫^{ひし}がれたのでしよう。皆顔を見合せながらうつかり側へ寄って火傷^{やけど}でもしては大変だと、氣味悪るそうにしりごみさえし始めるのです。

そこで私の方はいよいよ落着き払って、その掌の上の石炭の火を、しばらく一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢いよく寄木細工の床^{ゆか}へ撒^まき散らしました。その途端です、窓の外に降る雨の音を圧して、もう一つ変った雨の音が俄^{にわか}に床の上から起ったのは。と言うのはまっ赤な石炭の火が、私の掌^{てのひら}を離れると同時に、無数の美しい金

貨になって、雨のように床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見ているように、茫然と喝采^{かつさい}するのさえも忘れていました。

「まずちよいとこんなものさ。」

私は得意の微笑を浮べながら、静にまた元の椅子に腰を下しました。

「こりや皆ほんとうの金貨かい。」

呆気^{あっけ}にとられていた友人の一人が、ようやくこう私に尋ね^{たず}たのは、それから五分ばかりたった後のことです。

「ほんとうの金貨さ。嘘だと思ったら、手にとって見給え。」

「まさか火傷^{やけど}をするようなことはあるまいね。」

友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとって見ましたが、
「成程こりゃほんとうの金貨だ。おい、給仕、ほうき箒と塵取りとを持って
来て、これを皆掃き集めてくれ。」

給仕はすぐに言いつけられた通り、床の上の金貨を掃き集めて、うずたか堆
く側のテエブルへ盛り上げました。友人たちは皆そのテエブルのまわ
りを囲みながら、

「ざっと二十万円くらいはありそうだね。」

「いや、もっとありそうだ。きやしや華奢なテエブルだった日には、つぶれて
しまうくらいあるじゃないか。」

「何しろ大した魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるの
だから。」

「これじゃ一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けないような金満家になってしまふだろう。」などと、口々に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子いすによりかかったまま、悠然と葉巻の煙を吐いて、

「いや、僕の魔術というやつは、一旦欲心を起したら、二度と使うことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまった上は、すぐにまた元の暖炉の中へ抛ほうりこんでしまおうと思つてゐる。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合せたように、反対し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまふのは、もつたない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、ど

うしても暖炉に抛りこむと、剛情ごうじょうに友人たちと争いました。すると、その友人たちの中でも、一番狡猾こうかつだという評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたくないと言う。それじゃいつまでたった所で、議論が干ひないのは当り前だろう。そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、君が僕たちと骨牌かるたをするのだ。そうしてもし君が勝ったなら、石炭にすると何にするとも、自由に君が始末するが好いい。が、もし僕たちが勝ったなら、金貨のまま僕たちへ渡し給え。そうすれば御互の申し分も立って、至極満足だろうじゃないか。」

それでも私はまだ首を振って、容易にその申し出しに賛成しようと

はしませんでした。所がその友人は、いよいよ嘲あざけるような笑えみを浮べながら、私とテエブルの上の金貨とを咬くるそうにじろじろ見比べて、
「君が僕たちと骨牌かるたをしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思うからだろう。それなら魔術を使うために、欲心を捨てたとか何とかいう、折角せつかくの君の決心も怪しくなってくる訳じゃないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのじゃない。」
「それなら骨牌かるたをやり給えな。」

何度もこういう押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テエブルの上の金貨を元手もとに、どうしても骨牌かるたを闘わせなければならぬ羽目はめに立ち至りました。勿論友人たちは皆大喜びで、す

ぐにトランプを一組取り寄せると、部屋の片隅にある骨牌机かるたつくえを囲みながら、まだためらい勝ちな私を早く早くと急せき立てるのです。

ですから私も仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、嫌々いやいや骨牌かるたをしていました。が、どういうものか、その夜に限って、ふだんは格別骨牌かるた上手でもない私が、嘘のようにどんどん勝つのです。するとまた妙なもので、始は気のりもしなかったのが、だんだん面白くなり始めて、ものの十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心に骨牌かるたを引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らず捲まき上げるつもりで、わざわざ骨牌かるたを始めたのですから、こうなると皆あせりにあせつて、ほとんど血相けっそうさえ変るかと思うほど、夢中になって勝負を争い出

しました。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けな
いばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高きんだかだ
け、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の
悪い友人が、まるで、氣違ひのような勢いで、私の前に、札ふだをつきつ
けながら、

「さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作かさく
も、馬も、自働車も、一つ残らず賭けてしまふ。その代り君はあの金
貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引
き給え。」

私はこの刹那せつなに欲が出ました。テエブルの上に積んである、山のよ
うな金貨ばかりか、折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最

後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐かいがあるのでしよう。そう思うと私は矢も楯たてもたまらなくなつて、そつと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引き給え。」

「九。」

「王様。」

私は勝ち誇つた声を挙げながら、まっ蒼になつた相手の眼の前へ、引き当てた札ふだを出して見せました。すると不思議にもその骨牌かるたの王様キングが、まるで魂がはいったように、冠かんむりをかぶつた頭を擡もたげて、ひよいと

札ふだの外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰りニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨脚あまあしまでが、急にまたあの太森の竹藪にしぶくような、寂しいざんざ降ふりの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌かるたの王様キングのような微笑を浮べているミスラ君と、向い合って坐っていたのです。

私が指の間に挟はさんだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっている所

を見て、私が一月ばかりたつたと思ったのは、ほんの二三分の間に
見た、夢だったのに違いありません。けれどもその二三分の短い間
に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だとい
うことは、私自身にもミスラ君にも、明かになってしまったのです。私
は恥しそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。
あなたはそれだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り
出したテエブル掛の上に肘^{ひじ}をついて、静にこう私をたしなめました。

（大正八年十一月十日）

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
